



Research Report  
Center for Information on Religion

## 宗教情報センター研究レポート No.003

初出：葛西賢太「電子ネットワークにおける「本当の自分」探し Computer Mediated Reflexivity 出現の背景と意義」、電気通信普及財団研究助成「コンピュータ・ネットワークの普及と宗教的行為の変容に関する調査研究」成果報告書、黒崎浩行編著『電子ネットワーキングの普及と宗教の変容』2000年3月31日。

宗教情報センター  
〒190-0013 東京都立川市富士見町 5-1-7 ファーストビル 1F  
Phone: 042-528-7313 Fax: 042-528-7316  
<mailto:letter@cir.com>

© 2005 Center for Information on Religion. All Rights Reserved.  
『宗教情報センター研究レポート』の著作権は宗教情報センターに属します。無断転載はお断りします。

## 「電子ネットワークにおける『本当の自分』探し」について

このレポートは、電気通信普及財団研究助成「コンピュータ・ネットワークの普及と宗教的行為の変容に関する調査研究」成果報告書、黒崎浩行編著『電子ネットワーキングの普及と宗教の変容』2000年3月31日、に掲載されたものである。

共同研究のきっかけは、1995年に行われた「宗教と社会」学会学術大会のシンポジウム「情報時代は宗教を変えるか?」であった。この参加者によって学会内に「情報時代と宗教」プロジェクトが開かれ、数回の研究合宿が開かれた。その中から、黒崎浩行、田村貴紀、川島堅二、深水顕真の4名とともに、共同研究をやってみようではないかという話が持ち上がった。

「宗教と社会」学会と、黒崎氏の所属する國學院大學日本文化研究所が拠点となったが、当時葛西は新潟の上越教育大学に勤務しており、黒崎氏以外のメンバーも遠方であったため、話し合いはメーリングリストを利用して行われた。当時メンバー間で交わしたメールは数千通に及んでいる。かなり集中して議論をしたなかで私にとって印象的だったのは、電子メールという“ハイテク”を利用しての研究会も、結局お互いの論考を読みあう時間などはなくなるわけではなく、テクノロジーの外側の参加者の熱意がふつうの研究会以上に必須だ、ということであった。幸い私は仲間に恵まれた。共同研究は充実していたし、私自身も報告書の刊行や「宗教記事アーカイブARI」のサイト名などいろいろな提案をさせていただいた。

1998年からの共同研究のテーマは「電子ネットワークの普及は既成宗教にどのような変化を与えるものであるのか?」と、「電子ネットワークはどのような新たな宗教性を生み出すものなのか?」の二つであった。もちろん前者と後者はかなり密接に連携している。

私自身の関心は電子ネットワークそのものではなく、むしろそれを活かしてどのような共同性が成立していくかであったので、この報告書をもってこのテーマは一区切りをつけることにしたが、そのほかのメンバーは共同研究を継続され、さらに強力な新メンバーをも得て、前述の宗教記事アーカイブARI (<http://ari.shukyo-gaku.net/modules/mylinks/>) が運営されている。

葛西が上越教育大教官を辞して、大学サイト内の個人ホームページが失われたので、本文中の註8「現代世界の宗教性/霊性」研究会のサイトはいまは存在していない。この研究活動の成果は、伊藤・櫻尾・弓山編『スピリチュアリティの社会学』世界思想社、2004年、として刊行されている。

本レポートを読まれた方は、技術的に古いという印象を抱かれるであろう。今日のように、ネットワークのケーブルから解放されて、携帯電話やワイヤレスでの高速な通信が可能になる状況は、私たちも予測はしていたものの、それがもたらした帰結は予測を超えていた。しかし、画面に向かって書くという行為の持つ意味については現在も変わっていないと考えられる。また、葛西が宗教メディアの特性に関心を持つきっかけにもなった論考であるが、報告書はすでに在庫がないので、レポートの形でここに掲載することとする。

次ページに報告書の目次を採録した。報告書には研究上恩義のある書誌への謝辞が掲載されているが、ここでは報告書の編集の中核になられた黒崎氏へ、そして田村、川島、深水の3氏へ、御礼申し上げておきたい。

平成 17 年 3 月

宗教情報センター研究員  
葛西 賢太

## 『電子ネットワーキングの普及と宗教の変容』目次

|  |     |
|--|-----|
| はじめに.....                                    | iii |
| 総論.....                                      | 1   |
| 第1章電子ネットワークと宗教をめぐる研究史(黒崎浩行).....             | 3   |
| 1 はじめに.....                                  | 3   |
| 2 前史.....                                    | 4   |
| 3 「電子ネットワークと宗教」研究.....                       | 7   |
| 4 結びにかえて.....                                | 10  |
| 第2章電子ネットワーク上のコミュニケーション(田村貴紀).....            | 11  |
| 1 はじめに.....                                  | 11  |
| 2 メディア特性.....                                | 13  |
| 3 電子ネットワークの影響力.....                          | 16  |
| 第3章「担い手・参加者」についての調査方法(深水顕真・川島堅二).....        | 17  |
| 1 「担い手・参加者」の定義.....                          | 17  |
| 2 量的アプローチ.....                               | 22  |
| 3 質的アプローチ.....                               | 28  |
| 第4章電子ネットワークにおける「本当の自分」探し(葛西賢太).....          | 35  |
| Computer Mediated Reflexivity 出現の背景と意義       |     |
| 1 電子ネットワーク上に「宗教」はありうるか.....                  | 35  |
| 2 「本当の自分」とComputer Mediated Reflexivity..... | 40  |
| 3 結語.....                                    | 44  |
| 各論.....                                      | 45  |
| 第5章距離や少数派のハンディを電子ネットワークで超えて... (葛西賢太).....   | 47  |
| シュタイナーを学ぶ者たちの「自由」の概念                         |     |
| 1 はじめに.....                                  | 47  |
| 2 シュタイナーの思想と日本での受容.....                      | 48  |
| 3 ネットワークが提供したもの.....                         | 49  |
| 4 「自由」・平等と、編集による総合.....                      | 57  |
| 5 ネットワークの中の「自由」.....                         | 64  |
| 第6章電子ネットワーク上での自己観察の試み(田村貴紀).....             | 69  |
| vi   |     |
| FARION フォーラムを事例として                           |     |
| 1 電子ネットワークと内面的世界の関係.....                     | 69  |
| 2 電子ネットワークと自己.....                           | 71  |
| 3 FARION.....                                | 75  |
| 4 結び.....                                    | 81  |
| 第7章インターネットは地域の宗教構造を変えうるのか? (深水顕真).....       | 83  |
| 広島県内の寺院・教会ウェブサイトの事例より                        |     |
| 1 序論.....                                    | 83  |
| 2 浄土真宗系のウェブサイト.....                          | 86  |
| 3 他の仏教系ウェブサイト.....                           | 93  |
| 4 キリスト教ウェブサイト.....                           | 97  |
| 5 まとめ 宗教ウェブサイトの実力.....                       | 102 |
| 付録広島県内の宗教的ウェブサイト一覧.....                      | 104 |
| 第8章神社ウェブサイトをめぐる社会的文脈(黒崎浩行).....              | 107 |

|                                     |     |
|-------------------------------------|-----|
| 1 なぜ神社か.....                        | 107 |
| 2 神社ウェブサイト群の傾向.....                 | 109 |
| 3 神社ウェブサイト運営者へのインタビュー調査.....        | 117 |
| 4 バーチャル参拝をめぐる議論.....                | 125 |
| 5 むすびと展望.....                       | 127 |
| 第9 章宗教団体ウェブサイトの量的調査(川島堅二).....      | 129 |
| 1 調査の枠組について.....                    | 129 |
| 2 調査の実際と結果.....                     | 130 |
| 3 まとめ.....                          | 134 |
| 第10 章天理教のインターネット利用に関する試論(田村貴紀)..... | 139 |
| 1 天理教調査の意味.....                     | 139 |
| 2 インタビュー調査.....                     | 142 |
| 3 天理教信者によるインターネット利用についてのアンケート.....  | 146 |
| 参考文献.....                           | 181 |
| 初出一覧.....                           | 185 |
| 索引.....                             | 187 |

# 電子ネットワークにおける「本当の自分」探し Computer Mediated Reflexivity 出現の背景と意義

葛西賢太

## 1 電子ネットワーク上に「宗教」はありうるか

本章の目的は、電子ネットワーク上にあるさまざまな行為を研究するにあたり、宗教学的な視点にはどのような意味があるかを示すことである。ここではコンピュータを利用して文章を書くという行為に内包される自省的な特質をComputer Mediated Reflexivity とよび、その背景と意義について検討する。

### 1.1 電子ネットワーク上の「宗教」とその「新しさ」

「宗教」に対応する英単語religion は、「集める・集まる」という意味を持つreligare というラテン語に源を持つといわれる。ならば、人々が集まってコミュニケーションを持つ電子ネットワーク<sup>1</sup>も、宗教が存在する場の一つと考えることがひとまずはできそうである<sup>2</sup>。たとえば田村貴紀は様々な「宗教系」ウェブサイト<sup>3</sup>を収集・分類し、また開設者に電子メールによるアンケート調査を行ったが、1997年の調査の時点で、彼は300箇所以上のサイト（日本語・英語あわせ）を収集していた[田村1997b]。2000年1月現在「宗教系」サイトの数はもっと多い<sup>4</sup>。

1990年代はとくにマスコミで宗教という名を借りた諸々の事件について喧伝されたから、宗教事件についての何かしらの言及・言明を含んだもの、あるいは「宗教」「霊」といった語を含んだものを全文検索すれば大変な数になってしまうが、それらを宗教系サイトと呼んでしまうのは問題がある。また、宗教的な思想とは全く関係なしに、占いをするプログラムをとりあえずサイトの中においたものや、マスコミでおこなわれている宗教批判を社会批判の一環として繰り返しているだけのサイトもある。いずれにせよ、宗教をモチーフの一つとした言説が電子ネットワークに数多くみられるようになったということはいえる。主体的に自らを宗教系・思想系サイトと見なされるべく努力しているか否かを「宗教サイト」判定の基準にするにしても、その条件を確定することは容易ではなく、個々に判断するしかないと思われる。

電子ネットワーク外に実在する宗教教団やその信者がサイトを開設する例は実際に相当数にのぼっている。いっぽう、そうした基盤を全く持たずに、ネットの内部のみに「新しい」宗教現象が現れるようなことはあるのだろうか。神またはその代理人を標榜する人物がネットに現れて周囲に人が集まったり、儀式を行ったりするという事例は報告されている。たとえば、黒崎浩行が神社の「バーチャル参拝」の事例を検討[1999]し、またS. オリアリーがバーチャル儀礼について報告[O'Leary 1996]し、田村貴紀が旧ニフティサーブのフォーラムFARION（エフアリオ）において活動するチャネラーの自己や、電子会議室で実践される「自観」という行法について検討したもの[Tamura 1999a] などである。

これらは、不特定多数の人間が自由に出入りする電子ネットワークという場の特性を活用しているのも、思想上も伝統的な宗教教義や戒律にとらわれないことなどが強調されている。また信奉者たちは、新しいメディアで新しい時代にふさわしい「新しい」宗教なのだといったことを説く。しかし彼らの主張や実感に反して、このような特徴は実は「新しい」ものではなく、後述するように、伝統的宗教の中にも存在しつつ近年大衆的な形で広く見受けられるようになった思想運動に特徴的なものであり、電子ネットワークの普及に先立つものである[島蘭1996; Heelas 1996; 葛西1998a]。それゆえ、これらをもって、電子ネットワーク上に「新しい」宗教

形態があるとは言い難い。

宗教の定義をもう少し広げてみることはできないだろうか。電子ネットワークにおける実状を事細かに考える以前に、ここまでの議論で自明視されていた「宗教」の定義について改めて考えてみよう。現代において「宗教」の定義は、古典的な宗教学者が論じたような「聖なるもの」の有無や教団組織のありかたを指標とするようなものだけではありえないだろう。本章の目的を鑑みて、ここでは以下に二つの視点を示しておこう。

## 1.2 間主観的存在としての宗教

まず、宗教はどこにあるのか、宗教の存在する場を問うてみよう。たとえば、天理教の聖地とされている「おぢば」は奈良県の天理市にある。しかし天理教が存在するのはそこだけではない。天理教の書籍のなかにもあるといえるだろう。また、信者の内面にもある。それだけではない。信仰に反対したり賛成したり傍観したりしている家族や周囲、布教伝道の対象となる他者といった信者の家族との関係に注目すれば、信者の周囲にいる非信者の内面においても明確な問題あるいはおぼろげな懸念として（それが誤解されたものであったとしても）天理教は存在しているといえる。

この例にみるように、宗教は間主観的に存在しており、自覚的な信者の諸行為や、意図的な情報の発信・受信の有無に限定されずに、周囲との葛藤やずれとしても顕在化するものである。現代の宗教はしばしばそのようなずれとしてこそ顕在化する。これを本章での関心に即していれば、電子ネットワーク上で往来するデータに宗教的な語が含まれているかどうかといったことは、この事象の一端を捉えているにすぎないということになる。データが読まれ、読み手に何らかの心の動きが生じるからこそ、宗教が間主観的に存在するということになる。この考え方では、深い考えなしに冷やかに宗教サイトをのぞいてみた、といったことも含まれてくる。

## 1.3 「本当の自分」探しの出現

第二の視点として、現代宗教の特徴として、自己をめぐる霊性Self-spirituality がますます強調されていることにふれておく必要がある。伝統的な宗教religion は、宗教教団という組織や制度、教義、偶像崇拜、古風で排他的な考え方といった夾雑物を伴っているゆえに克服されるべきもの、と捉えられ、それらをとりぞいた“純粋な”“本質”たる霊性spirituality を称揚するような態度が一般的になってきている。こうした動きはニューエイジ運動[Heelas 1996]、精神世界文化、新霊性運動 = 文化[Shimazono 1999] 等々と呼ばれているが、注意すべきはこれらが既成教団（新宗教教団含む）の外部に独立して存在している「宗教ブーム」といったものではなく、既成教団内部にも組織や制度、教義、崇拜対象や伝統的な倫理観に対して懐疑的で、個人の自由を重んじるような態度が広く浸透していることである[葛西1998a]。

こうした動きの背景には、西欧的個人主義モデルの普及、高度情報化の結果として諸宗教についての知識が増えたこと（特にキリスト教文化と非キリスト教文化との出会い）、またそれに伴って諸宗教の差異を止揚するような「永遠の哲学」Perennial Philosophy<sup>7</sup>が提唱されたこと、これらの見解を支持するような人間心理理解としての心理学の普及と大衆化等々、かなり長いスパンでの変化が存在している。しかしこれらの変化や、ニューエイジ運動のなかにどのような要素があるかについて詳細に検討することは、ここでの目的ではないので別の機会に譲る。ここでは、自己に焦点を当て、「本当の自分」を希求し、自己の自律性・自由さとともに、自己責任の重さをも強調するような思想が広く受け入れられているということを指摘するのみにとどめたい。

「本当の自分」を希求するとはどういうことだろうか。昨今この語は人口に膾炙し、1990年代を生きたものには説明抜きでイメージできる語ではある。トリリングはこれを16世紀以降の文学にさかのぼって史的に検討している。彼によれば、自らの身分や階級を自覚してそれにふさわしく振る舞う「誠実」sincerity が重んじられていた時代には、本当の自分が偽の自分が

といった区別は形容矛盾でしかなかった[トリリング1989:9-14]。そのような区別は、社会が大きく変動し、身分や階級が自明のもでなくなったことによるという。変動する社会を批判検討の対象とするような知識階級、また自己を客観的観察の対象とするような態度が、「本物」という理念を問題化する。

現代において「本当の自分」を称揚する論者たちも、これについて正確に定義し得ているわけではない。トリリングは「本物」という理念が、伝統的な慣習や倫理、思想や、個人に対置され個人を束縛するものとしての社会などを、あしき「偽物」とすることによって、中身のない「本物」があたかも実在するかのように見せかけているのだという[1989:22,132]。

近代において人々の労働が機械に取って代わられるなかで、自らの生には価値があるのか各個人に問われることになる。人はそれを示すのに躍起になる[石川1992:15]。またそのために様々な方法が試みられることとなり、それを生業とする者さえ現れる。「物の時代から心の時代へ」といったキャッチフレーズは、個人の心の領域までも市場経済の侵入を許し、「本当の自分」探しという新しい需要を創出せしめた時代を示している。

#### 1.4 小括「本当の自分」探しは「宗教」か

宗教は間主観的に存在していると見なせば、これまで宗教学の検討対象と見なしてきた宗教を巡る様々な行為をかなり広範囲にとらえなければならない。ところで、電子ネットワークにおけるウェブサイトなどでの宗教的言説は、既成宗教の教義そのままの言説も残ってはいるが、不特定多数の読み手を対象とするゆえに、それらをよりソフトに、主要なメッセージだけを抽出したような、あたりさわりも特徴もない言説になりがちである。

したがって宗教系ウェブサイトのようなもの単体では研究対象としての価値は低く、参考資料以上のものにはなりにくいと思われる。研究に当たっては、周囲との間主観的な相互行為をとらえるような方法を用いるべきであろうし、また既成の宗教という枠にこだわらずに検討対象を拡張すべきである。

「本当の自分」を探す、あるいはそれを気にかけるという態度は、特定の神仏を崇拜対象とするような意味での宗教とは言い難く、古典的な宗教の定義の多くには当てはまらない。「本当の自分」探しで問題とされるのは、「宗教性」というより「真正性authenticity」である。宇宙の創造や人間の進化や靈魂の存在や世界の終末といった、人間を超越した「真理truth」よりも、自己を巡る体験の「真正性」 真実でありかつ価値あるものと認められること に関心が向いているのだ。これはP. ティリッヒが「究極的関心ultimate concern」という表現でとらえようとしたものの一つとはみることができるかもしれない。少なくとも、これまで宗教的な実践の中におかれていた行為の伝統を引き継いでいるという意味で、「宗教」であろうとなかろうと、宗教研究の対象と見なすことはできるだろう。第6章で田村貴紀が言及している「自観」という内省的実践などは一例といえるかもしれない。

「本当の自分」探しのうち、コンピュータを媒介として行われているものを、特にComputer Mediated Reflexivity と呼ぶことにしたい。次節でさらにこのCMR について検討することとしよう。

## 2 「本当の自分」と Computer Mediated Reflexivity

### 2.1 自己物語による「本当の自分」の探求

現代人が複数の役割を使い分けているという指摘は、トリリングに限らずさまざまな論者によっておこなわれている。職場での自分、家庭での自分、遊び仲間という自分等々と列挙していったとき、「本当の自分」はこの中のどこかに見いだせるだろうか。

“仮面の” “偽りの” 自分をはがしていった奥には「本当の自分」が厳然と存在しており、職場や家庭などの社会的拘束を取り除いていけばそれが得られるかのように述べる巷間の物言いがある。社会的拘束を取り除くと称する様々な心理統御技法 様々な心理療法、自己啓発セミナーや催眠療法 に対して人々は警戒心を持つ。しかしその一方で、日々の生活の中での自分は「偽物」であり、それらを取り去って「本当の自分」を達成する方法がどこかにあると

いう信念を人々は持ち続けてもいる。新しい服や新しい車を買うことによって、美容整形の手術を受けることによって、転職や脱サラをすることによって、「本当の自分」へと脱皮できると期待するのだ<sup>10</sup>。かくして「本当の自分」を希求するさまざまな行為は、ある種の熱意をもっておこなわれることとなる。

自分について語るという行為も、そのような意味を持っているとみなされており、宗教的体験談や説教を一つのテキストとして研究する基礎として<sup>11</sup>、自己物語論という一つのジャンルをなしている[浅野1994]。

浅野智彦によれば、自分のアイデンティティについての説明は、自己についての物語という形態をとらざるを得ない。自己についての来歴を介してアイデンティティは自覚される。物語などいくらでも書き換えられそうだが、異なる来歴を語って異なるアイデンティティを作り上げることは意外に難しい。物語の終点たる現在をうまく説明し肯定するために、物語の始点を注意深くえらぶことが重要であり、別のアイデンティティを作るためには、別の始点を探しそこから始まる別の物語を語り直さねばならないからであるという[1994:7-9]。そのため、語り直しを支える心理療法などの装置が重要になる。

## 2.2 Computer Mediated Reflexivity

このように自己について物語る行為は、電子ネットワークにおいてはどのように現れているのだろうか。現時点で主流となっているウェブと電子メールというコミュニケーションの諸特性は、田村による第2章および筆者による第5章で検討されているので参照されたい。ここでは特に自己について語るという行為に関わる諸点を確認する。

(1) 距離と時間の差を超えるので、出会うのはそれまで面識のない他者。それゆえ、語り直しが容易。実際に人々はしばしば語り直しを楽しみ、性別や年齢を変えたり社会的属性を伏せたり、新しい属性を担わせるためのあだ名を用いたりする。

(2) 無数の集団の中から意識して検索したりリンクをたどったりすることによって出会う故に、一般の社会集団よりも関心を共有できる可能性がより高い。その分、自己についてより熱心に語ったり、過剰に演技したりする可能性も高いと考えられる<sup>12</sup>。

以下で、ウェブサイトと電子メールそれぞれにおいて、自己について語るという側面を検討しよう。

### 2.2.1 ウェブサイトに自分をみる

自己をウェブサイトという形で外在化する作業は、開設者の自己の提示であるとともに、自己の整理・発見・再構成でもある。山下清美は、ウェブサイト開設によって、開設者が「自分について深く考えるようになる」と述べている。

サイトを作成して他者および自己からフィードバックを得られた場合、作成者にとってはもちろん大きな喜びとなるであろう。実は山下の調査では、個人ホームページの多くは公開されたもののほとんど訪問者がいないという。ところが、訪問者が少なくても、ページ開設者は作成する行為そのものに思いのほか喜びを見いだしていることもわかったのだ[山下1997b]。ウェブサイト作成という行為を通じて自分について語ることは、作成者にとって、自分をあらためて見直す喜ばしい営みなのだ。

なお、公開された内容が「演じられた」ものである点にも注意を払うべきである。電話番号・住所・写真などの個人情報までもを公開している人はさほど多くないが、これはプライバシー保護という観点からのみでなく、個人情報をどのように出してどのように自分を演じるかという演出・編集の側面も含まれている。

### 2.2.2 電子メールにおける没入感

メディアが社会に強い影響力を持つためには、そのメディアが最新のものであることよりは、技術的にこなれていて誰にでも使えるものであることの方が重要である[葛西1998a]<sup>13</sup>。

この点でウェブサイトと電子メールとの間には格差がある。画像や音声といった情報もとれえず提供できるウェブサイトなのだが、手軽な私的メディアとしてのこなれぐあいでは電子メ

ールには及ばない。「ネットサーフィン」をする人の多くは、通信速度、表示速度の遅さや、画像の精度の低さに落胆し、没入以前に興ざめしてしまった経験があるはずだ。操作の上ではワープロの延長上にある電子メールは、技術的にもウェブより歴史が長い。電子メールが文字中心の情報交換であることを理由に、補助的に「顔文字」と呼ばれる手法で感情表現を行うしかないと見る向きがある[宮田1993]が、文字による伝達がかえって想像力・創造力imagination-creativity を喚起する点については見逃してはならない。一つの聖典を読んでも読み手の認識枠組みによってそれがいかようにも解釈されうるように、ひとつの宗教情報が記述された電子テキストを読んだときにも、読み手の認識はそれに自らの経験や知識を重ね合わせて補完する。

ウェブサイトは作成時点と閲覧の時点とにタイムラグがある。電子メールも本来そのような「非同期メディア」であるのだが、実際にはタイムラグがあまり空かないように頻繁なやりとりがなされることも多い。さらに、人が通るかどうかわからない場所で網を張って待つようなウェブに対して、具体的な聞き手を想定しやすい電子メールのほうが相互性が高いといえる。これらの特質は、書くという行為にさらなる没入感をもたらす。

### 2.3 書くことのフロー

ある人にとっては涙が出るほど感情を動かす話題であっても、別の人にとっては冷静な分析の対象であるかもしれない、またある人にとっては理解不能で見る気も起こらないものであるかもしれない。不特定多数の参入が予想される電子ネットワークであるゆえに、書き手は自らの体験や考えを意を尽くして書きつづる。教義や組織ではなく個人的な体験のみが(トリリング的な意味で)「本物」とされるからだ。書き手は精一杯テキストが「本物」と呼ぶに値することを示そうとする。無我夢中で伝えようとする行為のさなかに、媒介物としてのコンピュータ及び電子ネットワークの存在はしばしば忘れられる。

電子ネットワークを介してのやりとりにおいて、媒介物の存在を忘れるほどの没入は、チクセントミハイがいうところの「フロー」である。彼はフローを「一つの活動に深く没入しているので他の何もかも問題とならなくなる状態、その経験それ自体が非常に楽しいので、純粋にそれをするということのために多くの時間や労力を費やすような状態」と定義している[チクセントミハイ1996:5]。

ディスプレイの向こう側に読者を意識して没入するフローの中で、機器の存在が意識の背後に後退して、意を尽くして書き連ねるテキストの中に意を尽くす自己の姿が透見される。他人に何かを伝えるために書くという行為を通して、自己について語っているのだ。

自らについての語りは、様々な社会的条件を離れて加工が可能な「テキスト」である。性別、年齢、社会的地位を詐称することさえできる。しかしおそらくは、普段と全く違う自分よりも、少し違う自分を物語ってみることの方が多はずだ。あまりにも自分と異なる人を演じることは正気ではできないということもあるが、もっと重要なのは、社会生活の中で他人に対する好悪などの感情を伏せておく行為が我々にとって必須のものである[奥村1998]のと同じく、CMRでも自分の見苦しいところは伏せた姿を示すというのがもっとも自然であり「礼儀にかなった」ことであるからだ。したがって、自分の真情を吐露することを意図した文章であっても、その作業においては少なくとも不作法にならぬ程度には自分を演出・編集することから逃れることはできない。

たとえば、職場ではいつもいらだっているけれども、電子メールではそれを伏せる余裕があるので、本当は優しくありたい自分を実践する＝演じるということがあるだろう。また、対面では臆して話せないがメーリングリストでは強気で人を仕切る自分を実践してみる＝演じるということもあろう。不特定多数の読者にアピールするために、感情表現は豊か(過剰気味)となる。うまくすれば自分が理想とするような姿を描き出すことができ、それを一読者として画面を介してナルシスティックに楽しむことができるかもしれない。

## 2.4 小括

自分について書くこと、あるいは何かを語りながらその語りを介して自分を示すことは、ナルシスティックなよろこびとあわせ、一つのことに没入するフローの喜びを伴う。書くことで自己省察を行いつつも、電子メールによる他者からの迅速な反応を受けて加速されるような様式は、一人黙々と日記を書くような行為とは一線を画している。かつての日本で「生活綴方運動」が自己を見つめ直す媒体を民衆に与えたのと同様に、CMR は人々に自分を見つめ直し、自己のシミュレーションを行ってみる場を提供したといえるであろう。

ただし、電子ネットワークの出現が「本当の自分」探しをもたらしたのではない。むしろ「本当の自分」探しの広まりの影響を受けつつ、さらにそれを加速するものとしてCMR はあるのだ。電子ネットワークは大きな時代精神の展開に対応し、その影響下に現れたものであるのだが、影響関係は一方的ではなく、CMR は時代からの影響を受けつつ同時にこの時代の変化を加速せしめている点を見逃してはならない。

## 3 結語

CMR を介して微妙に書き換えられた自己は「本物」なのだろうか。おそらくそうではない。書き換えという作業が容易に行われるゆえに、書き換えによって生み出した自己も過渡的なものにとどまってしまう。試作品のように作られた自己が「本物」かどうかは、「本物」であり続け実効性を示すことによって確認されるという循環的状况も見落としてはならない。ところでその努力は、ネットワークで自己を演出するシミュレーションほど容易ではない。宗教者が教義の上で善を説き、教団内で愛他的実践を行っていても、それを外部でなし得るかどうか問われるのと同様に、CMR に関わる人々も好ましい自己を電子ネットワーク外においても具象化できるかが問われるのである。

自己の再構成も個人的行為を通して身体に刻まれ、社会的行為を通して共同体に刻まれることなくしては、シミュレーションとしてのCMR を永遠に反復するだけになってしまう。受難の歴史が宗教共同体に手痛い打撃を与えつつも、そうした歴史的記憶を共有することが宗教共同体の本質的機能に関わっているように、現実生活の些末事、様々な拘束や悩み事の中で鍛えられてこそ、CMR も価値ある実践たりうる<sup>14</sup>。そのためには、さらに年月の積み重なりを待つ必要があるだろう。

## 註

1 固有名詞としてのインターネットと、パソコン通信の両者を併せて、ここでは電子ネットワークとする。

2 電子ネットワークを国家や地域と同じような「場」として考えるのではなくメディアとみなし、そこでの宗教現象を扱うという問いはやっかいである。「ビデオに表現された宗教」「書物に表現された宗教」といったような、そもそも学術的研究が可能かどうかわからないテーマを抱えることになってしまうからだ。まして書物やビデオ以上にウェブサイトは手軽に作成・更新ができ、規模の上でも資料の安定度の上でも容易ではないこととなる。

3 ウェブサイトは「ホームページ」と呼ばれる方が一般的だが、「一つのウェブサイトが複数のページで構成されており、その出発点にあるのがホームページ」というのが本来的な用語らしい。ここでもそれに従う。

4 我々はある程度網羅的な宗教系ウェブサイトの収集を行い数量的な分析を計画していた。しかし、ウェブサイトの特性上、現在その方針は限界に突き当たっている。(1) 各サイトは一つの完結した文書でありながら、同時にいつでも更新が可能であり、(2) 宗教関連サイト自体の数も増加したことにより、一ヶ月あたりの収集量はCD-ROM 一枚分の640 メガバイトを超えるようになった。そのため、我々がそれに目を通すことも不可能になってしまったのである。

5 このようにコンフリクトの発生による宗教の顕在化を捉えるやり方は、宗教研究の構築主義的アプローチと呼ぶことができよう。なお、天理教を例としてあげたのは、天理教が日本では最大規模の民衆宗教であることによる。

- 6 教団等を取り除いた「靈性」が、本当に"純粹"な"本質"であるかどうかは別問題であることを見落とさないようにしたい。
- 7 哲学者ハックスレイAldous Huxley が同名の著書において、諸宗教思想のアンソロジーをつくったことからこの呼称が用いられるようになった。
- 8 葛西他による研究成果として、たとえば以下のサイトを参照されたい。「現代世界の宗教性/靈性」研究会<http://www.juen.ac.jp/shakai/kkasai/religion/NRCS/index.html>。なお概要は『宗教と社会別冊2000』、「宗教と社会」学会、2000年4月にも掲載される。
- 9 コンピュータを媒介としたコミュニケーションComputer Mediated Communication からの造語である。Reflexivity は社会学者A. ギデンズが後期近代社会における自己のあり方を特徴づけるために用いた概念で、「再帰性」「反省性」などと訳され、個人が自己省察をしながらその結果を行為にフィードバックするようなミクロのレベルから、社会についての学術的研究の成果が社会の変化をもたらしていくようなマクロレベルでのフィードバックまでを包摂している。ここでもコンピュータで書くという行為の影響を、画面を見ながら文章を推敲する際のミクロなフィードバックと、その文章を電子ネットワークでやりとりすることによるマクロなフィードバックとを包摂して考えている。
- 10 実のところ、「自分」はそれら様々な社会的拘束によって構成されているのだ。それらを取り除きさえすれば、根気がない、だらしない、気分屋で浮き沈みの激しい、優柔不断な、そんな自分の奥に、根気強く頼りがいのある「本当の」自分がでてくるといったものではない。むしろ社会的拘束を取り去ったら何もかも残らないということさえある。たとえば[北山1995]を参照。
- 11 P. リクール『時間と物語』(1985年)での学的刺激と以後の思弁的な物語論の展開とはある程度独立する形で、民衆の宗教としての新宗教における体験談や説教の研究という分野は確立していた。たとえば島園・鶴岡1993『宗教のことば 宗教思想研究の新しい地平』大明堂などを参照。しかし本稿執筆時点では体験談や説教などについて考察する上で物語論に言及しないわけにはいかない。
- 12 S. タークルはMultiple Users Dungeon (MUD) という、電子ネットワークによって作られた疑似社会において、個人が複数のアイデンティティを自在にとりうることについて、実例を挙げて詳細に論じている。たとえば「電子メディアにおそろおそろさわっている若い女性」を演じたり、「車椅子の生活に耐えながらも疑似社会では活躍する青年」を演じたりするというぐあいである[タークル1998]。筆者にとって印象深かったのは、自己が複数の核をもって構成されているという、フロイトの後継者たちが高度に抽象的な理論で苦労して述べていることが、電子ネットワークでは具体的な事例として存在しているということである。
- 13 [葛西1998a]の執筆時点では、ワープロ、ファクス、コピーの3つこそが十分普及して技術的にもこなれて、メディアとしての影響力が大きいとしたが、今後は携帯電話の位置づけについても考えていかねばならないだろう。ただし、携帯電話による電子メールは、現段階では入力が不便なために、自己を自在に語るという域に達していないと思われ、CMR の事例として考えてはいない。
- 14 第5章で私はこのような価値ある実践とみなしうる事例を取り上げ検討している。